新年のご挨拶

New Year's Greeting

会長 松本 洋一郎

Yoichiro MATSUMOTO, President of JSME

〔東京大学 教授〕

日本機械学会会員の皆様、新年明けましておめでとうございます。

昨年来の日本の学術・科学技術を取り巻く状況は、予算の削減など、必ずしも明るくないと言えるでしょうが、うれしい出来事もいくつかありました。大きなものとしては、鈴木章、根岸英一両先生のノーベル化学賞受賞、宇宙航空研究開発機構による小惑星探査機「はやぶさ」が小惑星「イトカワ」からの試料を持ち帰ったことでしょうか。これらはいずれも、日本の科学技術の成果が国民、とりわけ科学技術に関心を持つ若者に夢と希望を与えたものと思います。とくに、「はやぶさ」は、本号の「新春座談会」にもありますように、工学・技術の実証という側面が大きく、宇宙工学、広くは機械工学にかかわる技術者の大きな自信になりました。これらは、長年に渡る基礎研究における地道な努力や、諦めることなくチャレンジを続けた結果です。

現在、日本の人口はすでに減少に転じ、世界でも類を見ないスピードで高齢化が進行するとともに、国際競争が激化し、欧米との競争のみならず、アジアにあっても近隣諸国の猛追を受けています。わが国が持続的に発展し、国際社会において名誉ある地位を占め続

けることができるかどうかは、科学技術・学術が、さらには、それらへの継続的な投資が決すると言っても過言ではありません。そのような状況の中で、機械学会は工学の中核学会として、技術開発をリードし、人材育成に責任を果たすべく、学術基盤を拡大・充実させ、社会に対する発信力を高めていく必要と責任があります。

さまざまな機会に申し上げてきましたが、機械工学は、持続可能な社会を支え、さまざまな課題解決の基盤です。今日の経済的繁栄や国際的地位を築くことができた原動力は、広い意味の機械にあったとも言えるでしょう。人口減少と高齢化が進展する中、人々の生活と社会の質を高め、世界的な規模での環境的課題に対応していくには、不断にイノベーションを創出していくことが不可欠です。イノベーションは単一の科学・技術によって成し遂げられるものではなく、さまざまな科学的技術的知識を政産官学の多様な立場から統合していくことが必要です。同時に、次のイノベーションの核となる学術を涵養しておくことが何にもまして重要です。さらに、人材だけが唯一の資源とも言えるわが国において、イノベーションを先導する人材の育成

は焦眉の急です。今や、世界各国とも国家成長の鍵となる高度な専門性、問題発見・課題解決能力、および高い国際性を備えた科学技術人材の育成に全力を注いでいます。科学技術人材の育成は、地道な継続が重要であり、一度断絶が起きてしまえば、それを元に戻すには、膨大な時間と投資が必要になります。大学、高等専門学校など高等教育機関、研究関連の独立行政法人などに加えて、グローバル化の真ただ中にある企業にとっても、このような人材の枯渇は、取り返しのつかない損失と損害を及ぼす恐れがあります。世界的に見ても、予算とその分野の論文数は強い相関を示すなど、「投資なくして、成果なし」は厳然たる事実です。しかし、現状の国家財政の危機的状況にあって、さまざまな分野における効率化は避けては通れず、単なる「競争」から、「共創」へと大きく舵を切る必要があります。科学技術を支える人材の育成と活用としての「知の拠点」である学会の「共創」に向けた活動の強化が求められていると言えるでしょう。機械学会にとっては、機械工学の基盤領域の強化・拡大に加えて、課題解決型の研究、技術の発展を図るため、国内外の関連他学協会との今までの枠を超えた連携がますます重要となってきています。言うまでもなく、国際的な情報発信の重要性もますます高まっています。国際チャプター（インドネシア、タイ）の活用、中国、韓国の機械系学会と協力関係を強化しつつ、諸外国の機械系学会との連携、関連する国際会議との協働など、国際活動の強化を図る必要があります。あらゆる機会を捉えて、このよう

な国際活動を、強化・支援していきたいと思っています。

さらに、学会構成員の多数である企業の技術者に魅力あるものとするべく、技術者の能力開発支援活動の強化、大学等の研究者との協力・協働が容易に行える開かれた環境の整備に努めています。長期的な人材の育成を考えますと、若者の工学離れ、国際離れ対策として、年次大会、総会などでの特別企画、日本工学会に設置される「科学技術人材育成コンソーシアム」への協力など、学会内外における活動を強化しています。また、会員シニアの活動の活性化に向け、シニア会の組織化、各種受託事業への参加など学会員であることの存在感を生かす活動を行うことが重要と考え、さまざまな機関、団体と協議を始めています。現在、小中学校生の理科離れ対策の一環として、教育現場への技術者の参加など、さまざまな新たな試みについて「日本産学フォーラム」を中心に議論が進んでいますが、学会としても組織的な取り組みを行うことも有用と考えて、イノベーションセンターを中心に実施に移しています。

グローバル化が進展し、あらゆる分野で国際競争が激化する中、日本は「第三の開国」の時期を迎えています。第一・第二の開国時と異なるのは、社会の急激な変化、複雑化の中で「知」の価値が高まり、「知の拠点」たる学会の役割・活動が重要になっている点です。機械技術者・工学者がこれからの「知の拠点」の担い手として大きく活躍することを期待して、新年の挨拶としたいと思います。